

私は映画世代である。テレビは遅れてやって来た。洋画や邦画を問わず映画ならばなんでもよかった。総天然色のアメリカ映画の食卓は、肉やパンや果物であふれていた。「これでは競争に負けるはずだ」。子ども心にもそう考えた。「早く食べよか」と。アメリカ人は会話ばかり弾んで、肉やパンにはなかなか手をつけなかった。パンをちぎったぐらいでシーンが変わった。「ちぎしよう」である。日本人は飢えながら映画を

観ていた。

私は新劇という言葉も知らなかった。「佐世保で劇団を観てくる」と長髪にボマードを塗った、銀行に勤めている親戚の男の人がパーマネントの女の人を連れて、わざわざわが家にあい

ちそうを話めた漁師や炭鉱の人が、一升瓶をぶら提げて観に来た。クライマックスになると、旅人姿の主役に向かって「早く、そんな男は殺せ」と罵声を浴びせた。仇役はアドリブで芝居気たつぷりに「俺が死んだら

からは言われたくないよ」といった会話をよくしたものであった。松浦には電気がなかったというのである。「よく言うよ」である。公民館の楽屋になかったのかもしれない。そう言いながらも、松浦を懐かしそうに話

興奮した七人の侍

さつに來たりした。インテリシエンスがにおっていた。「さしずめインテリだな」は寅さんばかりの台詞ではない。あれは佐世保まで新劇を観に行つたの

芝居にならん」と見えを切った。大衆演劇の沢童一とは東京の下北沢でよく飲んだ。「あんなの田舎はひどかった」「あんな

黒澤明監督の「七人の侍」を観たのがその時代である。興奮した。それも異様な興奮であった。映画監督の凄さを知った。映画監督になりたくなった。それまでは東映時代劇の「紅孔雀」や「笛吹童子」のスターを観て喜んでいて、「七人の侍」は数十回は観ている。

かもしれない。

おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

「砂の器」「仁義なき戦い」には文句のつけようがない。映画のすべてが詰まっている。「赤ひげ」までの黒澤明作品はよかった。黒澤明はどこで人間を諦めたのか。それとも総天然色になつてカラーを意識し過ぎたのか。いずれにしても「赤ひげ」以降の黒澤明は遠くへ行つてしまった。(松浦市出身)